

理論と実務の接点で金融界を展望

# 月刊 金融ジャーナル

10  
2015  
October  
No.711



「卓上」大庭英治

特集

金融機関が支える  
観光立国への道

アグリビジネス、新段階へ

55周年特集

未来への警鐘

～識者5人が振り返る“金融危機”～

地域とともに

広島信用金庫 武田龍雄 理事長

ランキング

全国銀行の決算比較

おかげさまで

55  
周年

# R 65

シニア層を  
ねらえ

介護旅行 SPIあ・える俱楽部

## 車いすでも快適な旅を

定年退職後の比較的自由な時間を趣味や旅行に費やすお年寄りが増えている。ただ、体力・健康面に不安を抱えたとき、多くのお年寄りは楽しむことを諦めてしまいがちだ。SPIあ・える俱楽部は、こうした諦めかけていた人たちに寄り添う「介護旅行」を切り開いてきた。飛行機や鉄道での移動、ホテルでの入浴といった旅行ならではの介護サービスを提供する。高齢者であっても、自分らしく快適に参加できる新しい旅行の形だ。

### 旅に寄り添うトラベルヘルパー

家族や友人と旅行に出かける喜びは何物にも代えがたい。それは、高齢で体力が弱ってしまったお年寄りも同じことだ。加齢に伴い足腰が衰え、急な尿意をもよおしやすくなるケースも多く、そうすると外出が面倒になってくるという。

特に要介護状態になると、「これ以上の迷惑はかけられない」といった遠慮などから、ちょっとした外出も諦めてしまう。あ・える俱楽部は、介護旅行を通して「殻に閉じこもりがちなお年寄りにもう一度、日常では味わえない外の世界を体感してもらい、生きる活力を提供している」(篠塚社長)。

こうした高齢者の旅行や外出をサポートするのが専門知識・技能を有するトラベルヘルパーだ。自宅や高齢者施設で行う通常の介護と違って、旅行中の介護となると、砂利道で車いすを押すのも大変で、移動中や宿泊先で

のトイレ、入浴、また気候の変化にも注意が必要。専門的な技能が求められるわけだ。

あ・える俱楽部では高齢者本人や家族などから相談が寄せられると、①旅行希望地や身体の状態などを踏まえたプランの打ち合わせ、②移動手段や宿泊先などの旅程作成見積



シンガポール旅行で食事を楽しむお年寄りと  
介助するトラベルヘルパー(右)

もり、③旅行に同行するトラベルヘルパーと事前に顔合わせした後に契約——。そして、希望の場所にトラベルヘルパーが迎えに行き、旅行出発となる。介護は高齢者と1対1で24時間付き添うケース、高齢者を含む三世代の家族旅行にトラベルヘルパーが加わるケースなど様々だ。

介護旅行の料金は、都内に住む要支援2の高齢者がトラベルヘルパーを利用して箱根に1泊2日の旅行をした場合で約10万円。5万4,000円(2万7,000円×2日間)の基本料金のほかに、トラベルヘルパーの交通費や宿泊費も利用者負担。料金は国内か海外か、身

## エス・ピー・アイ (SPI)

設立：1991年

資本金：1億円

本社：東京都渋谷区南平台町6-11

拠点：トラベルヘルパーセンター 11拠点

### ▶ 篠塚 恭一

(しのづか きょういち)

1961年千葉県生まれ、83年

東京観光専門学校卒、近畿

日本ツーリスト、旅行人材

の派遣会社などを経て、SPI

を設立。現在、代表取締役



体の状態（軽度～重度）などによって異なる。

トラベルヘルパー（1級～3級）は、篠塚社長が06年に設立した日本トラベルヘルパー協会が定めた認定資格。受講者の大半は介護従事者が占める。準2級は日帰り旅行、2級は海外旅行などにも対応する難易度となる。1級を取得すると、旅行コーディネーターとして活躍する水準だ。受講者は年間で750人程度まで拡大。あ・える俱楽部でトラベルヘルパーとして活躍するスタッフは総勢200人（準2級以上）となっている。

### 「あなたのスーツケースは僕が持つ」

旅行人材の育成を手がけていた篠塚恭一社長は1991年にJTBや近畿日本ツーリストといった大手旅行代理店に添乗員などを派遣するSPIを設立。徐々に添乗員の同行する企画ツアーが減少するなか、篠塚社長は「添乗員にも専門性が求められる時代が来ることを感じていた。スポーツや音楽、語学など、添乗員自身の商品性を高める得意分野が必要になって

きた」と振り返る。

そして、決定的な出来事があった。10年来の親交があった70歳代の老婦人が旅先でつぶやいた一言だ。「私、このスーツケースが持てなくなったら旅行は終わりにする」と。「そんなことで諦めてしまうのかと思ったが、確かにそれまでの旅行業界は体力・健康面に不安がある人を切り捨ててきた」のが実情だった。老婦人の諦めの言葉に篠塚社長は「あなたのスーツケースは僕が持つ」と即座に答えた。それが、あ・える俱楽部が展開する介護旅行の“想い”であり、原点である。

裕福で時間もあるが、体力面に不安を抱えるお年寄りは多い。これからも増えていくのは確実だ。「最後に故郷の墓参り旅行したい」「孫の晴れ姿（結婚式）を見てから死にたい」などと言っていたお年寄りが、「介護旅行をして目的を果たすと、みな一様に次の目標に向かって笑顔で語り始める」という。現在、あ・える俱楽部の介護旅行を利用する人は年間で400件（組）を上回る。

（編集部）

### 識者の論点



ニッセイ基礎研究所  
主任研究員  
前田展弘

ケアを必要とする高齢者に対して、「支える」視点からの商品・サービスは相応に開発されてきたが、「楽しみ」を提供するものは非常に少ない。要介護高齢者はやがて1,000万人を超える見通しにある。年齢や障がいに関わらず、介護旅行という「楽しみ」を提供する当事業は本当に素晴らしいものだ。親孝行ビジネスとしても代表的な事業と言える。年に数日だったとしても、その思い出が高齢者の日々の幸せにつながる。当事業がさらに拡充されていくことが望まれる。